〔論文〕

伝記による道徳教育

― 歴史的変遷と教材化への視点 ―

藤　田　善　正*

本研究の目的は、伝記の教育的意義を考察し、伝記を活用した道徳教育に対する反対論やその問題点を指摘する意見を考察し検討する中で、よりよい伝記の活用方法を探求することである。

伝記は、有効な道徳教育の資料になると考えられる。しかし、取り扱いには、留意すべきことがある。それをまとめると次のようになる。

① 偉人といえども人間であるから、悩み・迷いと言った弱さがあり、そこに焦点を当てることによって、子どもの心との重ね合わせを図る。

② 転機に着眼させ、それを通して、自分の今まで気付かなかった心の転機に気付かせる。

③ 人物の業績や行為そのものよりも、その行為を支えたものの考え方や心情について堀り下げ、ねらいとする価値に向かって考えを深めさせる。

④ 成功・失敗という結果よりも、人間が懸命に生きた姿の尊さに目を向けさせる。

⑤ 存命中の人物を取り扱う場合には、その成功に至るまでの努力と工夫に目を向けさせる。

⑥ 人物の言葉を扱う場合には、学年が進むにつれて、自分たちの生き方につながる討論に発展するように方向づける。

キーワード：道徳教育　伝記　逸話　「私たちの道徳」　発達

１　問題と目的

現在、我が国の道徳教育の今後の方向性については、「特別の教科」に向けた論議が活発に行われている。さて、国の道徳教育重視の施策の一環として、2014（平成 26）年４月から小学校１年生から中学校３年生までの全児童･生徒約1000万人に無償配布された『私たちの道徳』には、読み物として古今東西の伝記資料がかなり採り上げられているだけでなく、現代の各界の人物の業績や考え、言葉等がコラムのような形で多数掲載されている。道徳教育や「道徳の時間」の授業において、子どもに大きな感動や感化を与える力をもつ一方、偉人の伝記（偉人伝）や存命中の人物の伝記には、取り扱い方に留意しなければならないことがある。伝記は、模範的人物像を典型的に示すだけに、どのようなことに留意して道徳教育や「道徳の時間」の指導に活用するのが有効かを検討する必要がある。

本研究の目的は、伝記の教育的意義を考察し、伝記を活用した道徳教育に対する反対論やその問題点を指摘する意見を考察し検討する中で、よりよい伝記の活用方法を探求する

*大阪総合保育大学

ことである。

2　欧米諸国における伝記による道徳教育

「偉人の伝記」に描かれている人物像は、いずれも、人生に対して真剣に取り組んだ人間の生きざまである。これを読んだ子どもは、その人物の生きざまの中から生きる希望や勇気を感じ取るだけでなく、その生きざまを模倣し、摂取しようとする意欲が起きてくると考えられる。リンカーンが、少年時代にワシントンの伝記を愛読し、ワシントンのような人間になろうと立志したことや、豊田佐吉が、英国の作家で医者のサミュエル・スマイルズ（Samuel Smiles, 1812 ～ 1904）の著『自助論（Self-Help)』の訳本『西国立志編』（中村正直訳）[18] を読んで感動して立志し、ついには自動織機を発明したことは知られている。この「自助論」は、1859 年発行の 300 人以上の欧米人の成功談を集めた逸話集であり、序文にある「天は自ら佑くる者を佑く。」という言葉は有名である。「自助論」は、イギリスが産業革命や議会制民主主義を興し世界で最も栄えていた時代に書かれたもので、自己責任主義に基づいている。その考え方が近代化を進める明治の青年たちに受け容れられたと考えられる。この本は、発刊された時代だけでなく、現代も各国語に訳されて全世界で読み継がれている。また、日本において、「西国立志編」は、1872（明治 5）年の学制が公布されてから、文部省が翻訳本を教科書として不適当とし、許可制にする 1883（明治 16）年までの約 10 年間教科書として使われたこともある。

さて、伝記の教育的効果について述べた著書としては、イギリスの外交官で歴史家でもあるハロルド・G・ニコルソン（Sir Harold G. Nicolson, 1886 ～ 1968）の「英国における伝記の発達」（The Development of English Biography, Hogarth Press, 1927）が挙げられる。その中で、ニコルソンは次のように述べている。

「・・・伝記の教育的効果は、読者が伝記の主人公に共鳴し、その人生経験を理解し、その精神的印象を確実につかみ、自らの心と態度にある変革をもたらし、自主的に自らの人生を創造しようという意識を持つことである。・・・」[15]

前に述べた二つの事例は、このニコルソンの言葉を体現したものと言えよう。

イギリスの教育学者ノーマン・Ｊ・ブル（Norman J. Bull, 1916 ～　）は、子どもの道徳性の発達を研究したが、発達段階に応じた資料が道徳性を高めるという考えに基づき、中間期（9 ～ 13 歳）には伝記的資料が有効であると述べている [2]。

また、近年では、アメリカ合衆国のレーガン政権の教育長官を務めたウィリアム・Ｊ・ベネット（William J. Bennett, 1943 ～　）は、退官後の 1994 年『魔法の糸－こころが豊かになる世界の寓話・説話・逸話 100 選－』（A Treasury of Great Moral Stories）を著し、現在まで 3000 万部を超えるベストセラーとなったが、この中にも伝記の逸話が数多く採り上げられている。この著書は、子どもや若者達の人格をいかにして高めるかを主題として書かれているが、古今東西の民話や寓話、偉人・賢人の逸話、随筆が集められている [1]。ベネットの著書において、道徳は、抽象的な徳目や概念を論じるよりも、具体的な人物の行動が示されている方がわかりやすいという考えに貫かれている。言い換えれば、人は価値に感動するのではなく、その価値を体現した人間に感動すると言えよう。

キリスト教による宗教教育が多かれ少なかれ道徳教育の基盤になっている欧米の諸国に

おいて伝記が道徳教育の役割を果たしてきたことは、注目すべきことである。

３　修身の問題点と今後の研究課題

日本において、江戸時代後期に頼山陽が著した人物中心の歴史書「日本外史」が、幕末の尊皇攘夷運動に大きな影響を与えたのは事実であるが、学校教育において伝記による道徳教育が積極的に行われたのは、1890（明治23）年の教育勅語発布以来、「修身科」においてである。貝塚茂樹は、その著「道徳教育の教科書」において、修身教科書の特徴は、徳目主義と人物主義であると述べている[10)]。

①　徳目主義

教育勅語と「小学校教則大綱」に掲げられた徳目に基づいて教材を配列して、系統的に道徳を教えようとした。

②　人物主義

徳目は抽象的な観念であるので、伝記や人物の逸話、言行の「例話」を用いて、徳目を具体的に教えようとした。

修身教育では、人物主義の考えがもとになって、教材として古今東西の偉人伝の逸話が多く採り上げられた。ところが､教科書の検定期（1890 ～ 1904）に続く国定教科書（1904 ～ 1945）の変遷を見ると、大きく次のような３つの問題点が挙げられる。

第１に、修身の第１期国定教科書は、1904（明治37）年に使用開始されたが、教育勅語以後の検定期の教科書と比べると、児童の発達段階も考慮され、近代的市民的倫理が強調されていて､すべて否定すべきものではない｡ところが､その後６回の改訂のたびに､｢孝｣を基本原理とするものから､「忠君」「愛国」を基本原理とする国家主義的な要素が強くなり、子どもの人格の育成よりも思想教育に近くなってきたという問題がある。

戦後、修身教育が国家主義・軍国主義の一端を担ったということから否定される最大の理由がそこにある。

第２に、人間誰しもがもっている「弱さ」を認めない人間観が見られる。例えば､戦前･戦後を通じて､日本人に一番よく読まれてきた伝記の『野口英世』について述べてみよう。1937（昭和12）年発行の尋常小學修身書巻四（小学４年生用）の中では、次のように描かれている。

「（前略）五歳・六歳となって、英世は、外に出て近所の子供たちと元氣よく遊ぶやうになりましたが、きやうそうでもして英世が勝つたときなどは、負けた子供たちは、くやしまぎれに、英世のかたはの手を笑ひました。小學校に行くやうになつても、友達はやはり其の手を笑ひました。英世はそれをざんねんに思ひ、

『手は不自由でも、一心に勉強して、きっと今にりっぱなひとになって見せるぞ。』

と、かたく決心しました。（後略）」[14)]

この文を読んだ現代の子ども達は、先ず、これは本当だろうかと、首をかしげるのではないだろうか。そのようにひどくいじめられているときに、勉強して、立派な人になろうと考えるだろうかと。また、仮に、そのことを素直に受け取ったとしても、それは、野口英世が偉かったからできたことで、自分にはとてもできないというとらえ方しかできないのではなかろうか。

人間だれしもが持っている弱さ・醜さにふたをした美談というものは、たとえ一種の感動を与えることができても、真に、子どもに生きる力を与えることはできないのではないだろうか。言い替えれば、子どもが自分の生きざまとの間に接点を見つけられてこそ、初めて道徳の教材・資料は、生きてくると言えよう。

第3に、当初はかなり多かった西洋の偉人の逸話が次第に減り、その代わり日本の偉人の逸話が多くなってきたことが挙げられる。広く世界に目を開かせることよりも、自国の優越性を強調した教科書を学ぶことによって、子どもの視野が狭くなったのではないかと想像される。

1945（昭和20）年の第二次世界大戦の敗戦まで存在した修身教育は、教育界において国家主義・軍国主義教育の象徴として否定的に批判されるが、戦前においても、修身科の改革について書かれた書物は存在する。また、実物の修身の教科書やそれを使った授業に接しなければ、正しい批判はできない[10)]。特に、授業の実態については、当時授業を行った教員の記録文書は多少残っているが、戦後約70年を経て、授業者・児童が高齢化し、存命者も少なくなることでわからなくなってしまったことが多い。さらには、修身の授業を受けた子どものその後の人間的成長はどうであったのかということも、問われなければならない。残念ながら、この分野の研究は非常に遅れている。

修身教育が行われていた時代には、国語においても、近づいてくる津波から村人の命を救うために、自分の家の刈り取った大切な稲に火をつけて危険を知らせた幕末の和歌山県の庄屋　濱口儀兵衛の伝記『いなむらの火』や賀茂真淵と本居宣長の出会いを描いた『松坂の一夜』のような歴史的な話が積極的に採り上げられた。また、国史では、人物とその業績が中心に採り上げられている。さらに、唱歌でも、「二宮金次郎」「加藤清正」「児島高徳」「水師営の會見（乃木希典）」「ワシントン」のような歴史上の人物の美徳を描いた叙事詩に作曲されたものが採り上げられた。さて、当時の子どもたちにとって、これらの教材は道徳的な教訓として受け止められたのであろうか。それとも、面白い珍しい話として受け止めたのであろうか。

4　戦後教育と伝記

そのようなこともあってか、戦後は、逆に、偉人の伝記が道徳教育だけでなく、教育の場で活用されることが極めて少なくなってきた。例えば、国語の教材として採り上げられるときでも、1947（昭和22）年から1968（昭和43）年の学習指導要領改訂の時期まではかなりの比率で国語の教科書で取り扱われていたが、特に1977（昭和52）年の改訂以後は、激減している。また、採り上げられる人物も、足尾銅山鉱毒問題に取り組んだ田中正造のような人や、山岳ガイドという地味な仕事を長年務めた志鷹光次郎のようないわゆる無名の人、ヘレン・ケラーやマザー・テレサのように社会的弱者やそれに積極的に寄り添ってきた人を採り上げる傾向が見られる[7)]。

終戦直後、文部省は、修身科の方法面の欠点を指摘した上で、道徳と社会認識の教育の密接な関係を重視し、新教科「公民科」の設置を構想していた。しかし、公民教育構想は、占領政策に反するとされ、「社会科」の設置を求められた。また、1948（昭和23）年国会で、「教育勅語排除失効確認決議」がなされ、「教育基本法」を制定した。ところが、1950

（昭和 25）年の第二次米国教育使節団報告書では、道徳教育は社会科だけから来ると考えるのは無意味で全教育活動を通じて力説されなければならないと見直しを求めた。その結果、文部省は、学校における道徳教育は、社会科をはじめ各教科その他教育活動の全体を通じて行うこととしたが、必ずしも所期の効果をあげているとは言えなかった[10)]。

1958（昭和 33）年の教育課程の改訂に当たり、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を補充・深化・統合するための時間として、「道徳の時間」が特設された。その後、1964（昭和 39）年以後、「道徳の時間」に活用する資料（文部省資料）も開発されたが、伝記も小学１年生以上学年が進むにつれてかなり多く登場するようになった。しかし、これらの資料は教師用とて学校に配布されただけで、子どもに配布されたわけではない。また、現在に至るまで文部省資料を含む道徳の副読本が教育委員会で予算化されている地域ばかりではない。教育課程は、学校で編成するものとされるため、都道府県・地域・学校・教師によって、道徳教育や「道徳の時間」に行われていることには差が大きい。従って、伝記が「道徳の時間」においてよく活用されているかどうかも差が大きいと考えられる。この時期において、学校として伝記資料を中心に道徳教育に取り組んだ実践研究としては、今治市立常盤小学校の「人物による道徳指導」が挙げられる[9)]。

また、小原國芳は、1970（昭和 45）年、道徳の教授に最も有効なものは、感激を与える適切な例話を豊富にもっていることであるという考えをもとに、童話・寓話や伝記の逸話を集めた 1000 ページを超える「例話大全集」を刊行した[16)]。

小寺正一は、「道徳読み物資料の特質」[11)] の中で、小学校副読本資料に採り上げられた登場人物を類別し、実在の人物を主人公とする資料 130 篇延べ 131 人について分析している。その結果、学年が進むにつれて実在する人物が増加していることや、視点別では、視点１と４が多いことを検証している。その理由としては、視点１と４の内容項目が、葛藤を経験したり苦悩を重ねながら社会的業績を残したりした実在の人物の生き方と合致するからであろうと考察している。また、現代社会を生きる人物を積極的に登場させようとしている傾向も指摘している。その上で、小寺は、これらの資料における人物の描き方や人間関係の描き方が、模範的ないい話、できすぎた話があるがゆえに、現実社会や児童の生活とどう結びつけるかを絶えず意識されていかなければならないと結論づけている。

最近では、中学生を対象にした、道徳教育をすすめる有識者の会編著『13 歳からの道徳教科書』[3)] や、小学校高学年からを対象にした『はじめての道徳教科書』[4)] も 2012 ～ 2013（平成 24 ～ 25）年にかけて次々と発行されている。これらは、もちろん学校で教科用図書として使用される教科書ではなく、教科書として使われることを期して作成された資料集なのであるが、その根底に共通するのは、

①　人物には、具体的な行動が示されていてわかりやすい。

②　人は価値に感動するのではなく、その価値を体現した人間に感動する。

という考えである。

現行の学習指導要領は、小学校では、2011（平成 23）年４月から、中学校では 2012（平成 24）年４月から全面実施された。そこでは、第３章　道徳の第３　指導計画の作成と内容の取扱いの中に 3.「道徳の時間における指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。」として、その（3）に、「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、児童が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、児童の発達の段階や特性

等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」と明記されている[12)]。

ところで、『私たちの道徳』には、伝記資料が読み物やコラム・言葉等のような形で数多く掲載されている。また、歴史的な偉人だけでなく、マラソンの高橋尚子、サッカーの澤穂希、体操の内村航平などのスポーツ選手やｉＰＳ細胞を開発しノーベル賞を受賞した山中伸弥ら最近、活躍した存命中の人物が数多く紹介されている。死によって業績が確定した人物はともかく、存命中の人物を扱うにあたっては、配慮すべきことがある。

『私たちの道徳』に読み物として登場した人物は表1、コラム・言葉等に登場した人物は表2のようである[13)]。

5　偉人伝を使った教育に対する反対論

さて、偉人の伝記を活用した教育には、反対論やその問題点を指摘する意見もあるが、それらの意見を要約すると、次のようになる[5) 6) 16)]。

第1は、時代背景や、その人物の置かれた状況が、現代の子どものそれとは違いすぎるので、そのまま与えたのでは、子どもの生きざまと結び付きにくいというものである。

第2は、偉人を尊敬するという考えは、立身出世主義につながり、偉人の生きざまを模倣せよという考えは、自分にやれないことをさせようとする権威主義につながるというものである。

第3は、偉人伝は、成功者の話であり、成功したことそのものに価値があるというものの見方を植えつけることになりはしないかということを危惧するものである。

第4は、特に、児童用の伝記は、その人物のよい面だけの記述に終始して、美化されているので、その人物の心のひだに触れていないことが多い。そのような浅い人間理解のさせかたでよいのかというものである。

6　新しい視点からのアプローチ

これらの考えの中には、傾聴し、取得すべきものもあるが、かえって、現代の教育のもつ問題点を浮き彫りにしているものもある。そこで、これらの意見に対しては、次のように考えられる。

第1の考えは、確かに一理ある。しかし、偉人といえども、人間としての共通性がある以上、教師は、むしろ授業の中で、生きざまの接点を求める工夫をすべきではないだろうか。もし、時代背景が違うものは理解しにくいからという理由で、偉人伝を教育の場から排除するならば、同様の理由で、古典や、歴史も排除しなければならないことになる。古典や歴史の教育は、結局、現在生きている我々に何らかの共通性や、示唆してくれるものがあるからこそ、大きな価値がある。

第2の意見は肯定できない。このような考えをおし進めてきた結果が、怠惰なありのままの姿を出せば、それでよいのではないかという現代の風潮を拡げてきたとも言えよう。理想も憧れもない人生の何とつまらないことであろう。理想や憧れがいかに人間を高めてくれるかということについて、我々は、もっと真剣に眼を向けるべきであると考えられる。

第3の意見は、一概には、そうとは言い切れない。偉人伝が成功者の話であるとは言い

表１　『私たちの道徳』（読み物）に登場する人物

小学校（１・２）	小学校（３・４）	小学校（５・６）	中学校
二宮金次郎	高橋尚子	アニー・サリバン	石井筆子
ファーブル	リンカーン	中谷宇吉郎	
	葛飾北斎	野口英世	
		澤田美喜	
		小川笙船	
		加藤明	

表２　『私たちの道徳』（コラム・言葉等）に登場する人物

小学校（１・２）	小学校（５・６）	中学校	
武者小路実篤	宮澤賢治	湯川秀樹	シュバイツァー
日野原重明	毛利衛	ユーゴー	ケネディ
シラー	奥村土牛	アインシュタイン	緒方洪庵
河合雅雄	マザー・テレサ	サン＝テクジュベリ	ハイデッガー
小学校（３・４）	千住明	山中伸弥	吉川英治
澤穂希	山上憶良	世阿弥	フランクル
マーキュリー	立花暁覧	西田幾太郎	大木聖子
手塚治虫	野口英世	河合隼雄	ワーズワース
俵万智	小林虎三郎	松下幸之助	杉原千畝
千住真理子	坂本龍馬	貝原益軒	アンネ・フランク
良寛	新渡戸稲造	新渡戸稲造	老子
牧野富太郎	千玄室	チャップリン	パスカル
天野篤	クーベルタン	若田光一	ルソー
小篠綾子	尾本惠市	アラン	西村雄一
井深大	三枝成彰	太宰治	吉野作造
石川啄木	**中学校**	マザー・テレサ	菊池寛
小泉八雲	香川綾	正岡子規	渋沢栄一
小学校（５・６）	アリストテレス	夏目漱石	ガンディー
マータイ	ホラティウス	本田総一郎	ゲーテ
内村航平	フランクリン	ゲーテ	エマーソン
豊田佐吉	クラーク	キルケゴール	小津安二郎
森光子	アウレリウス	ロマン・ロラン	鈴木邦雄
向井千秋	スピノザ	新島八重	北里柴三郎
イチロー	魯迅	フィヒテ	内村鑑三
ピタゴラス	松井秀喜	与謝野晶子	国木田独歩
福沢諭吉	上杉鷹山	倉田百三	鎌田實
吉田松陰	白洲次郎	山岡鉄舟	濱口梧陵
夏目漱石	曽野綾子	孔子	西岡常一
十八代中村勘三郎	井上ひさし	ヴォルテール	岡倉天心
マリー・キュリー	ボールドウィン	ジッド	白洲雅子
池田菊苗	伊能忠敬	振分精彦	野村萬斎
ラボック	柴田トヨ	鈴木大拙	加納治五郎
			緒方貞子

切れない。不遇のうちに死に、死んでから後になって初めてその価値が認められた者もいる。どんな人生にも失敗や失意のときがある。誰も失敗することを望んだりしない。成功したか、失敗したかは、結果に過ぎないし、また、そのような考え方で指導すべきではなかろうか。

第４は、確かにその通りであることが多いと言えよう。だからこそ、その人物の心のひだに触れるような指導が望まれる。しかし、指導においては子どもの発達を考慮する必要がある。小学校低学年の子どもに、行為の動機や、ある行為を選択するまでの複雑な過程を理解させることは、困難である。また、その人物の悪い側面に焦点を当てて指導することによって、良い部分まで消えてしまうようになってはいけない。

そのような意味からも、今までとは違った視点から、偉人伝を見直し、取り上げていく必要があると考える。そこで、筆者がこれまでに行った指導実践事例を交えながら、伝記と道徳教育の関連を探っていきたい。ここで筆者が敢えて、「道徳の時間」の指導と言わずに、道徳教育という言葉を使った理由は、伝記は、道徳の時間だけに限らず、国語や、社会を初め各教科や特別活動、あるいは総合的な学習でも扱うからであり、その基本的な考えには、共通するところがあるからである。

７　人間の弱さとそれを乗り越えた転機に焦点を当てた指導の在り方

（１）偉い人だと恐れ入らせるな

かつて、筆者が、「道徳の時間」に野口英世を取り上げ、「不とう不屈」の価値について授業を行ったとき、英世が毎日のように学校で「てんぼう」とからかわれていたときに、どう対処したかを子ども達に予想させたところ、ほとんどの児童が、

「英世は、学校に通い続けた。」

と、答えた。さらに、その理由を尋ねてみたところ、

「野口英世は偉い人だから、それぐらいのことでは学校を休んだりさぼったりしない。」

という反応が返ってきた。これは、事実と全く反対のことである。英世は、その辛さのため、不登校となり数日間山で昼間を過ごし、それを知った母の涙の説得で改心したというのが事実である。

ここに、偉人伝を資料として扱うときの問題点が、集約的に現れていると言えよう。子ども達は、野口英世は偉い人だから、偉いことをするに決まっていると、最初から恐れ入っている。これでは、本当の英世の人間としての悩みや弱さに触れることもなく、ひいては、その悩みや迷いを克服した英世の真の偉さに感動することも少ないと考えられる。

そのようなことから、資料として偉人伝を扱うポイントの一つは、資料中の葛藤場面に焦点を当て、そこで起こったと想像される人物の迷いや悩みといった人間の弱さを掘り下げていくことであると考える。そのことによって、資料と子どもたちの生きざまの間に接点を持たせることが可能となろう。子ども達も、日々の生活の中で、たとえ時代や場面に違いはあっても、同じような迷いや悩みをもつと考えられる。近寄れないほど偉い人だと恐れ入らせるのではなく、自分達と同じだという気持ちを敢えてもたせる必要もあると考える。

（２）ねらいに迫るために

さて、授業を進めるに当たっては、まず何よりも、いかに本時のねらいに迫るかということを第一に考えるべきである。その上で、資料を全部通して与えるほうが有効か、分割して与えるほうが有効かを考えるべきである。資料を全部通して与える場合は、感動を与えることを中心に考えた展開が多いが、この場合でも、行間を読み取らせたり、感じ取らせたりすることによって、平板に流れないようにしたい。また、資料を葛藤場面の前で切る場合は、葛藤時の心理状態を考えたり、その後の行動を予想させたり、その行動のもとになる考えを話し合わせたい。

①　実践例１

資料『タイヤの工夫』（原題『空気タイヤの発明』文部省資料Ⅲ－３－９）には、ダンロップが苦心して空気タイヤを発明するまでのことが描かれている。資料では、研究の過程で、初めに、次に、今度は、と、工夫したことが次々と個条書きのように書かれている。これをそのまま与えたのでは、ダンロップは、何の苦もなく次々と泉のようにアイデアが浮かんできたかのようにとらえるかもしれない。しかし、実際には、「初めに」と、「次に」との間には、研究がうまく行かず失意のときがあったに違いない。その時の悩みを想像させることによってこそ、それを克服したダンロップの真の偉さが理解できるのではなかろうか。このような行間を読み取らせる工夫が大切である。また、ダンロップをがんばり続けさせたものは何かということについて考えさせてみることも必要である。一つのことを成し遂げることの個人的な意義と、社会的な意義を、きちんと押さえた上で指導に当たりたい。

②　実践例２

資料『ぬれた本』（原題『正直エイブ』文部省資料Ⅰ－３－９）には、リンカーンが、少年時代に近所の人から借りた本を濡らしてしまったのを、正直に謝っただけでなく、お詫びとして、三日間畑仕事をしたというエピソードが描かれている。ここでは、本を濡らしたところで資料を切って、そのときのリンカーンの心の状態に焦点を当てた。

「このときのリンカーンは、どんな気持ちになったでしょう。」

「自分がこんなことになったら、どう思うでしょう。」

「これから先、リンカーンは、どうするでしょう。」

「何故、そうするのですか。」

このような発問によって、リンカーンの悩みや迷いが、自分の経験や生きざまと重ね合わさって浮き彫りにされてくる。また、行動の予想や、その行動を支えるものの考え方を話し合うことによって、正直・誠実という価値について、子どもの考えを高めることも可能である。「金を出して弁償すればいい。」とか、「後でばれたら、もっと叱られるから謝る。」といった他律的な考えも、子ども達の話し合いを通して高めることが可能となる。

（３）転機に着眼させる

生まれたときから偉いという人間はいない。伝記を読むと、必ずある時期に大きく変わる転機が見られる。そのような転機に着眼させて、伝記資料を指導すれば、子ども達は、それと自分の生きざまの対比を通して、同じような場面における自分の行動を内省して、今まで気付かなかった自分の転機を発見できるのではなかろうか。

①　実践例３

資料『なんべんもなんべんも』（原題『やなぎとかえる』文部省資料Ⅲ－１－１０）は、小野道風が、何回失敗しても柳の枝に跳びつこうとし続け、ついに跳びついたカエルの姿を見て、今までの勉強に対する考えを改めるというものである。ここでは、それまでの道風の勉強に対する考え方と、辛いことはすぐ投げ出しがちな子ども達の姿を重ね合わせておけば、道風の人生における発見に対する感動は、より大きいものになろう。また、何かをやり続けている体験をもっている子どもにとっては、そのような共通体験が、自信にもつながる。

②　実践例４

資料『やわらかいなわと、かたい石』（東京書籍「新しい生活４」 出典　大石真作『やわらかいなわとかたい石』 えらい人の話　実業之日本社）は、スペインの神学者イシドールの少年時代の逸話である。勉強ぎらいで、学校を怠けて悪い仲間と遊び回っていたイシドールが、ある日、井戸の硬い石が、柔らかい縄でこすれて凹んだことを見聞きして、今までの自分を反省して、自分の考えで行動することの大切さに目覚めるという話である。友達に引きずられて行動しがちな自分たちの姿を見つめさせた上で、この資料を扱うと、自律的に行動することの大切さについて考えを深めさせることができよう。

このように転機がはっきりと描かれているような資料においては、そこに着眼させて授業を展開することが大切である。それは、中心発問にもつながる。また、これは伝記資料に限ったことではない。

『なんべんもなんべんも』は、小学校低学年の資料である。子どもたちは、小野道風よりもカエルのほうが偉いのではないかといったとらえ方をすることもあるかもしれない。カエルが偉いと思うのはよいが、カエルは、小野道風に努力の大切さを教えるために跳び続けたのではない。カエルの姿を見て自分と重ねあわせることによって自分のあるべき姿を見つけた小野道風の偉さを押さえておく必要がある。このような資料のよさは、人間だけでなく、あらゆるものの姿や生きざまの中に、「自分を育てるこやし」を見つけているところである。「自己教育力」が、現代の教育の大きなテーマになっている現在、このような資料は、一つの示唆を与えてくれる。

（４）生きざまの共通点を求める

偉人伝中の人物と現代の子どもでは、生きた時代や置かれた状況が違うので、すぐに自分の生きざまと結び付けにくいということは事実である。しかし、「道徳の時間」に学ぶことは、人物そのものではなくて、ある人物を通して、一つの価値を中心にして道徳的な考えを高め深めることである。例えば、資料が、『二宮金次郎』であっても、二宮金次郎の人生そのものを学ぶのではなく、二宮金次郎を通して勤労という価値について学ぶのである。従って、ねらいとする価値に迫るのに、ある人物の伝記のエピソードが最もふさわしい場合には、積極的に利用すべきであろう。

また、行為そのものは同じでなくても、その行為を支える心情や考え方に共通性がある場合、そこに、子どもの生きざまの間に接点を持たせることが可能である。そのような考えに基づくと、一見結び付きにくいと思われるような、時代や場所の異なる人物の行為も、現代の子どもの生きざまと結び付けることができよう。

①　実践例５

資料『友達の赤シャツ』（青葉出版『小学生のあゆみ』　出典　鶴見正夫作『宮澤賢治』偉人物語　学習研究社）には、赤シャツを着て登校したために、級友からいじめられている友達をかばって、自分も明日から赤シャツを着て登校すると言った少年時代の宮澤賢治の姿が描かれている。これも、行為だけに目を向けると、このような行為は、なかなかまねのできることではない。現実には、いじめられている友達をかばったためにかえっていじめのターゲットにされることさえあろう。また、現代では、男の子が赤い服を着ることは普通のことで､珍しくないから､そのようなことでからかう者もいないであろう｡しかし、いじめは、異質なものを排除する心がもとになっていることも少なくない。だから、そこに共通性を求めて、いじめられている友達を黙認できない気持ちに焦点を当てて指導すれば、最も有効で現代的な「信頼友情」の資料となり得る。しかし、ここで

「みんなは、宮澤賢治のように行動できますか。」

などと聞いたらかえって逆効果である。それはかえって、賢治の行為に憧れている子どもの意欲に水をさすようなものである。

②　実践例６

資料『リストの弟子』（原題『大音楽家のなさけ』文部省資料Ｉ－４－２０）では、病気の家族の薬代を稼ぐために「リストの弟子」と偽ってコンサートを開こうとしていた女の人の事情を聞いたリストが、本当に自分の弟子にするという逸話である。これも、同じような場面を子どもが経験することは絶対にないであろう。しかし、ここでは、相手の立場、事情を考えて行動する心を育てることがねらいである。それなら、相手の立場、事情をあまり考えずに行動することの多い自分たちの姿を見つめさせることによって、自分と資料の接点づくりができる。私は、授業の導入で、手の骨を折ってギブスをはめて描いた子どもの絵を見せて、自由に批評させた。すると、出てくる批評のほとんどが、その絵の欠点であった。そこで、この絵の描かれた事情について話したところ、子どもたちは、初めて自分たちが相手の立場、事情を考えずに行動していることに気付いた。このような接点づくりも可能である。

このように、視点の当て方によっても、伝記資料を生かして使うことができる。二宮金次郎の銅像を見て、今時このようなことをしていたら交通事故に遭うなどと言う人がいるが、このような人は、物事の現象面・皮相しか見えない人と言わざるを得ない。このような考えがいかに本質から外れているかは、むしろ子どものほうが見抜いているかもしれない。要するに、教師の人間観の浅さ・深さが授業にも日々の指導にも反映する。

（５）結果だけに目を向けない

偉人伝が成功者の美談になりがちなのは事実であるが、成功したから偉いといった考えで指導すべきではない。世の中には、善い動機で物事を始め、その過程において努力したのにもかかわらず、結果的には失敗することや、世に認められないこともある。逆に、自分の欲望を満たすためだけにしたことが、結果として大成功することもあるからである。

例えば、地動説を唱えたために宗教裁判にかけられたガリレオや、幕府が朝廷に無勅許で日米修好通商条約を締結したことを知って討幕を表明したため安政の大獄で処刑された

吉田松陰のような人物もいる。また、生前はあまり高い評価を受けることがなく、死後になってその作品が高く評価されるようになったゴッホやシューベルトや宮澤賢治のような人物もいる。

アムンゼンが、自分の悪口を言い回っているノビレ将軍を救うために北極へ向かい、そのまま行方不明になって死んだ話は有名である。結果から見れば、アムンゼンは、この点に関しては明らかに失敗者である。しかし、この行動があったがゆえに、アムンゼンは、ただの極地探検家としてではなく、すぐれた生き方をした人間として後世に残ったと言えよう。これは、成功・失敗を越えたものでる。

そこで、小学校の中・高学年で、成功者の伝記（偉人伝でなくても）を扱うときには、次のような発問をすることも有効である。

「もしも、成功していなかったら、その人の生き方は、何のねうちもなかったのだろうか。」

この発問によって、子ども達は結果よりも、動機や、その結果を生み出すための過程こそが大切だと考えるようになる。また、そのようなものの見方をつけていくことが、現実の生活においても、人間を理解する上で大切である。学年に応じて、少しずつ動機まで考えられる子どもに育てていきたい。そして、何よりも、人間が懸命に生きることの尊さを感じることのできる子どもに育てていくことが望まれる。

（6）教師の人間理解

特に歴史上の人物や伝記を授業で取り扱うときには、教師の人間理解の深さが授業に反映する。物事の結果や皮相しか見えなければ、授業は、所詮底の浅いものになり、場合によっては、本質から逸れたものにさえなる。また、物事を一面からだけ見ていると、片寄った見方になってくる。そのような意味からも、複眼的思考が求められる。

シュバイツァーは、20 世紀初頭から約半世紀にわたって、ガボンのランバレネにおいて病気に苦しむ人々の救済のためその地に向かい医療に尽くした。その功績によってノーベル平和賞を受賞し、世界の聖者の一人に数えられているが、その地においてあまりよく言われていないというのが現実である。その理由は、シュバイツァーが、自らの神学思想を現地の文化より優先し、また同時代の知識人たちの多くと同様に、白人優位主義者の側面をもっていたことなどである。[19)]

このように、偉人伝に取り上げられるような人物といえども、何らかの人間的欠点を持っているのは、むしろ当然のことである。いろいろな側面をもっているのが人間である。しかも、全く反対の側面が同居していることも決して珍しくない。例えば、野口英世は、ヒューマニストでエゴイスト、孝行息子にして道楽息子、細菌王にして借金王、日本人にして世界人であり、そのどちらが欠けても、野口英世ではない。教師は、人物の多面的理解を心がけねばならない。

しかし、特に小学校教育の場において、そのすべての面を教える必要があるかと言えば、それは別問題である。例えば、小学校低・中学年の子どもに、野口英世は、金遣いが荒く、お金が入れば一晩で飲んでいたと教えてから、その後で親孝行をしたと教えても、よい方は印象に残らず、悪い方だけが印象に残ってしまうであろう。高学年や中学生になれば、幼少年期において貧しい中で育ち、お金の計画的な使い方を学ぶことのなかった野口英世が、金遣いが荒くなったことについてある程度理解できるかもしれない。しかし、これと

ても、教師がそのようなことについて示唆を与えなければ子どもが自ら気付くことは難しいのではなかろうか。いずれにせよ、事実であるということと、教えてもよいということは、別問題である。これは、歴史教育において人物や事件について指導する場合にも共通する考え方である。

教師は、人間の多面的理解と共に、指導に当たって、何を教え、何を教えないかを選択すべきである。「道徳の時間」の指導の場合においては、その時間のねらいに迫るのに有効かどうかということが、一つの基準になろう[5)]。

（７）存命中の人物を扱う場合の留意点

『私たちの道徳』には、現代の各界の有名人の言葉等がコラムのような形で多数掲載されており、また、存命中の人物がかなり多く採り上げられている。とりわけ、スポーツ選手は、子どもたちにとって身近な存在である故に採り上げられている。スポーツ選手の多くは、10代から20代にかけて優れた記録や業績を残し、ヒーローとなる。また、厳しい練習を通して短期間で高度な人格形成をする人も多くみられる。そこまでに至る努力や創意工夫は尊いものである。しかし、平均寿命が約80歳の現代においては、スポーツ選手であった期間は、人生の序章に過ぎない。その後の人生においてつまずくこともあろう。極端な例ではあるが、オリンピックのメダリストが、受刑者となるケースもある。存命中の人物を取り扱う場合には、その人物の言葉が生まれた背景を考えたり、その成功に至るまでの創意工夫や努力に目を向けさせたりすることが大切である。たとえ、教師がその人物に対して好意を強く感じていても、指導に当たって、それを前面に出してはいけないし、子どもたちをその人物のファンに仕向けるような扱いをしないように留意すべきである。

（８）人物のコラムや人物の言葉を扱う場合の留意点

人物のコラムでは、ただその人物が偉かったということで止まるのではなく、その人物の業績を支えたものの考え方に焦点を当てた指導が望まれる。また、それを子どもたちの生き方につなげるような発問が求められる。

例えば、「植物と共に生きた人　牧野富太郎」を扱う場合には、子どものころから植物が大好きで、観察したり、絵にかいたり、名前を調べたりしたところに留意して指導すれば、理科の植物栽培や観察で工夫したことと結び付けることができる。そして、学級の中で地味に見られているような児童に光を当てることもできよう。

人物の言葉については、その人物について深く掘り下げるよりも、その言葉はどういうことを言っているのだろうかと問いかけて、意見を出し合う授業、特に小学校高学年や中学生では討論につなげるような授業展開が望ましい。

なお、フランスでは、現在「公民・道徳教育」という教科を設定している。そこでは、格言を使って指導する方法も、よくとられている。例えば、「自由は無知が終わるところから始まる」というような格言を使って、それはどういう意味なのだろうということを子どもたちと一緒に話し合うという授業があり、日本でも参考になるところがある。

例えば、小学校１・２年生にフリードリヒ・フォン・シラーの「友じょうは、よろこびを二倍にしにし、悲しみを半分にする」という言葉を扱うときに、シラーの人と業績を詳しく伝える必要はない。

「これは、どういうことを言っているのでしょう。」
という発問で言葉の共通理解を図り、
「こんなことを感じることはありますか。」
という発問で、学級内外でのなかよしの実例を挙げさせるような指導が望ましいのではなかろうか。

小学校5・6年生にワンガリ・マータイの「『もったいない』を世界共通の言葉に」を扱うときには、
「マータイは、なぜこんなことを考えたのでしょう。」
という発問でマータイの気付きをとらえ、
「自分たちの生活の中にある『もったいない』を考えましょう。」
という発問で討論を行い、自分たちとの接点をもたせ、自分たちの生き方に返していくような指導が望まれる。

（9）結論

以上のようなことから、伝記（偉人伝に限らない）は、有効な道徳教育の資料になると考えられる。しかし、取り扱いには、留意すべきことがある。それをまとめると次のようになる。

① 偉人といえども人間であるから、悩み・迷いと言った弱さがあり、そこに焦点を当てることによって、子どもの心との重ね合わせを図る。
② 転機に着眼させ、それを通して、自分の今まで気付かなかった心の転機に気付かせる。
③ 人物の業績や行為そのものよりも、その行為を支えたものの考え方や心情について堀り下げ、ねらいとする価値に向かって考えを深めさせる。
④ 成功・失敗という結果よりも、人間が懸命に生きた姿の尊さに目を向けさせる。
⑤ 存命中の人物を取り扱う場合には、その成功に至るまでの努力と工夫に目を向けさせる。
⑥ 人物の言葉を扱う場合には、学年が進むにつれて、自分たちの生き方につながる討論に発展するように方向づける。

このようなことを通じて、伝記資料は、子どもの生きざまとの間に接点を作ることが可能となろう。また、そのような接点を持たせてこそ、有効な指導ができると考える。「悩みを通して歓喜に至れ。」というベートーベンの言葉は、葛藤を通した感動こそが、より大きなものになることを述べている。教師は、指導に当たっては、複眼的な視点をもって、その人物を読み解き、子どもの発達に応じて教材として提供していくことが求められる。

参考・引用文献

（1）ウィリアム・J・ベネット著　大地 舜訳（1997）　魔法の糸－こころが豊かになる世界の寓話・説話・逸話100選－　実務教育出版
（2）ノーマン・ブル著　森岡卓也訳（1977）　子供の発達段階と道徳教育　明治図書
（3）道徳教育をすすめる有識者の会編著（2012）　13歳からの道徳教科書　育鵬社
（4）道徳教育をすすめる有識者の会編著（2013）　はじめての道徳教科書　育鵬社

（5）藤田善正著（1997）　感動と感化で創る道徳教育　47-59　明治図書
（6）深川恒喜著　図書館教育研究会編（1959）　読書による道徳教育　55-71 学芸図書株式会社
（7）幾田伸司著（2012）　戦後小学校国語教科書における「伝記」教材の変遷　鳴門教育大学研究紀要　第 27 巻　215 - 224.
（8）石川佾男・竹ノ内一郎編著（1990）　小学校　新しい道徳の構想と実践 154-155　東京書籍
（9）今治市立常盤小学校著（1967）　人物による道徳指導　明治図書
（10）貝塚茂樹著（2009）道徳教育の教科書　31-53 学術出版会
（11）小寺正一著（1995）　道徳読み物資料の特質－小学校副読本資料における人物の扱い方－　道徳教育方法研究創刊号　25-34　日本道徳教育方法学会
（12）文部科学省編（2008）　小学校学習指導要領　106　文部科学省
（13）文部科学省編（2014）　私（わたし）たちの道徳　文部科学省
（14）文部省編（1937）　尋常小學修身書巻四　99-100　文部省
（15）Sir Harold G. Nicolson（1927）　The Development of English Biography, Hogarth Press
（16）小原國芳著（1957）　道徳教育論　140-152 玉川大学出版部
（17）小原國芳編（1970）例話大全集　玉川大学出版部
（18）サミュエル・スマイルズ著　中村正直訳（1981）　西国立志編　講談社学術文庫
（19）寺村輝夫著（1990）　アフリカのシュバイツァー　童心社

Moral Education Based on Biographies

:A Viewpoint towards Historic Changes and the Make of Teaching Materials

Yoshimasa Fuzita

Osaka University of Comprehensive Children Education

The purpose of this research is to observe the educational significance of biographies, and to pursue better practical methods for utilizing biographies through analyzing the opposing arguments and opinions regarding problems in the use of biographies in moral education.

We believe that biographies can be used as effective resources in the education of morals. However, there are some points to which we need to pay particular attention. Those points are described below.

① Even the noblest people are still simply human and have troubles and worries.
We will focus on this point in order to level with the children.

② While particularly focusing on turning points (of people's lives), we will help these children look at turning points in their own life which they have not yet realized.

③ Rather than focus on the results or actions of people, we will help the children focus more on the thoughts and emotions which brought about those actions in order to dig below the surface and help them think more deeply about the values of intentions.

④ We will help them concentrate more on the value in living an earnest life rather than results such as success or failure.

⑤ When dealing with the biographies of living people, we will guide the children to look more at the planning and efforts which lead towards those people's success.

⑥ When dealing with the quotes of people, we will guide students to become able to develop discussions about one's way of life as they advance through school.

Key words：moral education, biography, anecdote, "Our morality", development